



# 8月15日 [玉音放送] の音響考古学

昭和天皇の肉声が刻まれたレコード盤の謎を追う

藤田赤目 著





---

## 藤田赤目 (ふじた あかめ)

---

1953 年名古屋市生まれ 舞台音響家。

現代演劇の音響プランの仕事多数。主な作品に、『寿歌』(北村想)、『ハイ・ライフ』(流山兎祥)、『月ノ光』(竹内統一郎)、『夜の子供』(生田萬)、『恋する妊婦』(岩松了)、『鯨よ! 私の手に乗れ』(渡辺えり)、『ドールズタウン』(鄭義信)、『ニンゲン御破算』(松尾スズキ)、『ぬけがら』(佃典彦)、『荒れ野』(桑原裕子) などがある。(※括弧内は作/演出)

舞台作品で玉音放送を扱う機会があることから、ドキュメンタリー音の記録に関心を持ち、玉音盤の研究を始める。

千葉大学理学部中退、日本舞台音響家協会理事、桜美林大学芸術文化学群非常勤講師 (2008 - 23)、座・高円寺 劇場創造アカデミー講師 (2010 -)。

ピストルとストッキングの出る芝居が趣味。

---

## 8月15日 [玉音放送] の音響考古学

---

著者 ふじた あかめ  
藤田赤目

電子版発行 2024 年 5 月 19 日

オンデマンド版発行 2024 年 6 月 28 日

発行 ちじんかん  
地人館

〒 116-0014 東京都荒川区東日暮里 6-56-6 長戸ビル 3 階

Tel 03-6806-7937 Fax03-6806-7939

<http://chijinkan.com/>

©2024 Akame Fujita

太平洋戦争は、ラジオとともに始まり、ラジオとともに終わった。

大本営が1941年12月、「帝国陸海軍は、本8日未明、西太平洋においてアメリカ、イギリス軍と戦闘状態に入れり」とラジオで発表した言葉から太平洋戦争が始まった。以来ラジオは国民を鼓舞しつづけたが、45年8月15日、昭和天皇の「終戦の詔書」のラジオ放送で終わった。いわゆる玉音放送である。

その放送のために天皇の肉声を録音したレコード盤が作られたのだが、どのような機器が用いられたのか、今も保管されている複数の録音盤にある音の違いは何を意味するのか、「音響考古学」を提唱する舞台音響家が、その謎を追う。

#### 【表紙】

ラジオに使われた東京電気「マツダ真空管」の広告（昭和14年）



戦前に作られた円盤録音機のひとつ  
(電音 DP-17-K 型)

## もくじ

- 1 章 はじめに 5
- 2 章 録音技術（1940～60年代） 20
- 3 章 宮内庁の発表 47
- 4 章 玉音盤と宮城事件 61
- 5 章 玉音の原稿 79
- 6 章 玉音放送当日 92
- 7 章 NHK 版について 106
- 8 章 読売版の怪 127
- 9 章 寺田版および玉音盤のまとめ 148
- 10 章 副本（録音 1 回目）について 158
- 11 章 実音レコード 162
- 【巻末資料】 172
- 【註】 174
- 【参考文献】 178
- あとがき 181

## コラム一覧

- 「玉音」の読み 8
- ウンウン響く B29 18
- 戦時下のラジオ放送 19
- 音響単位と音響用語 21
- 周波数補償（イコライジング） 32
- “マツダ”の商標 39
- 「録音心得」（Presto 社型録 1940 より） 43
- 速度とピッチとの関係 45
- デジタル録音とは 50
- セルロース盤の経年変化によるノイズの増加 53
- 音盤の内外周の特性差 56
- 「鞞く」の読みは？ 84
- 抜けた接続詞とは？ 85
- ラジオの時報 97
- 放送電波管制 101
- テープの伸びではない 121
- シートレコードについて 128
- 敵性放送防圧（ジャミング） 140
- 「歴史的音源」（れきおん） 144

# 1章 はじめに

## § 音響考古学

毎年8月15日が近づくとテレビなどで聞かれる「堪え難きを堪え 忍び難きを忍び…」の音源はどこに保存されていたのでしょうか？先人の研究によって明らかになったところもありますが、まだ多くの謎が残されています。

2015年に宮内庁が発表した音源と、それ以前に出た数多くのレコード盤／フォノシート／録音テープ／CDなどの音源を、聴取・比較・分析することにより新たな事実も見えました。

現在聞くことのできる「玉音」には、元は同一ながらその成立過程の違いにより、複数の版が存在します。それを解明していきます。

これまで政治・社会的な切り口で取り上げられてきた「玉音」を、音声・録音盤・録音機などに着目しながら、音響的な視点から追究します。

録音原稿の「終戦の詔書」にも注意を傾けました。「音響考古学」と称します。音響用語については、適宜コラム・註などで解説します。

## § 玉音盤

音の記録再生は、今ではスマートフォンがあれば誰でもができるようになりました。録音が可能になったのは、およそ150年前のエジソンによる錫箔すすはく円筒式蓄音機の発明以来です。音楽・人物・自然など様々な音声おとが記録されてきました。

日本の録音で最も特異なのは玉音盤です。1945年（昭20）8月14日深夜の警戒警報発令下に、44歳の昭和天皇ひろひと裕仁が皇居内の宮内省(1)の一室（図1-1）で陸軍大元帥の軍装（図1-2）で読み上げた「終戦の詔書」を録音したレコード盤です。

あきつ み かみ

現御神の声の初めての録音で一点物です。

翌日正午からラジオ放送されました。いわゆる玉音放送です。

ポツダム宣言の受諾をやむなしとしながら、<sup>(2)</sup>なおも国体護持を巡って継戦派と終戦派が対立している状況を、一気に終戦に導きました。「承詔必謹（みことのりをうけたまわりては かならずつつしむ）」が大勢となり、軍人や国民に敗戦を周知徹底する役割を果たしました。

天皇の声を意図してラジオで放送したのはこれが初めてで、<sup>(3)</sup>日本の放送史においても特筆に値する出来事です。

一方で、陸軍の一部に玉音放送を阻止する動きがありました。もし放送に「失敗」していたら、「死中に活を求める」とする聖戦が継続し、「一億玉砕」の本土決戦に突入した恐れも皆無ではありませんでした。そうなれば、死傷者はさらに増大し、戦後史は大きく書き換えられることになりました。

昭和天皇をはじめ玉音放送に関与した人の多くは明治生まれです。玉音放送を“生”で聞いた人は、今や 80 歳を越えました。



【図 1-1】録音配置（4 章に詳細図 [図 4-3]） 下村海南『終戦秘史』1985 より



【図 1-2】昭和天皇（昭 18）

（写真提供：ジャパンアーカイブズ）

録音に使われたのは、日本電気音響（DENON、以下電音と記す）製の円盤録音機（図 1-3）。録音機材は、皇居から目と鼻の先の東京放送会館（以下正式名称の放送会館と記す）から持込まれました。

録音を担当したのは、日本放送協会（以下放送協会と記す [現 NHK]）の 4 名の技術職員でした。録音には専門の技能を要しました。

情報局総裁・宮内大臣・放送協会会長・侍従ら合わせて十数名が立ち会いました。

天皇は 2 回朗読し、2 回目が OK テイクとなりました。1 回目の録音盤を副本、2 回目を正本と呼びます。いざさか取つき難いですが、宮内庁に倣って以下この名称を使います。

副本・正本は、それぞれ 2 組・複数枚です（後述）。

#### ◆ 玉音盤の呼称

- ・ 録音 1 回目 (NG テイク) → 「副本」 (2 組 7 枚)
- ・ 録音 2 回目 (OK テイク) → 「正本」 (2 組 5 枚)



【図 1-3】電音 DP-17-K 型 機構部 型番中の数字は、設計または製造開始の年を表わす。「17」は昭和 17 年。（写真提供：日本オーディオ協会）

## 2章 録音技術（1940～60年代）

日本が太平洋戦争に敗れた1945年（昭20）は、**蝋管式蓄音機**（図2-1）がまだ一部で使われていた時代です。

玉音に関する1940年代から60年代の録音技術を概観します。

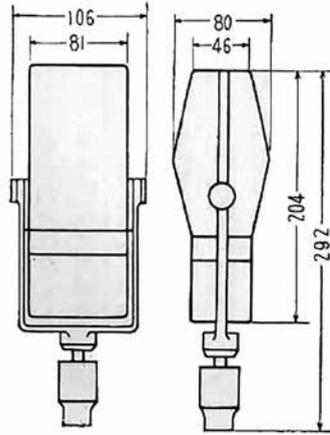
アナログ録音には原理・方式の違いにより、**磁気／光学／機械式**の3種があります。



【図2-1】蝋管式蓄音機（1899頃）

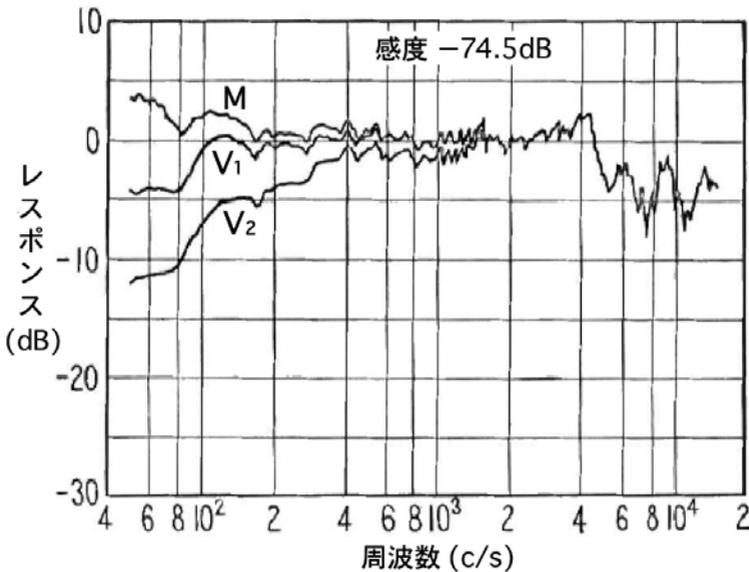


単位 mm



A 形 (OB 1028)

【図 2-15】 A 型ベロシティマイクロホン OB1028は放送協会の型番。(『マイクロホンハンドブック』1961より)



【図 2-16】 A 型ベロシティマイクロホン周波数特性 (『マイクロホンハンドブック』1961より)



【図 2-17】 A 型ベロシティーマイクロホン 銘板 製造時期により、東京電気無線／東京電気／東京芝浦電気の 3 種ある。



【図 2-18】 絵葉書の外装（昭 17）

### 3章 宮内庁の発表



【図3-1】玉音盤と収納缶 左より、収納缶と蓋／1枚／3枚組／2枚組。1枚は「食糧問題に関するお言葉」。盤面に景色が写り込んでいる。窓外に富士見櫓<sup>やぐら</sup>。 (写真提供：宮内庁)

宮内庁は2015年8月1日、ウェブサイトにて、玉音盤の写真・音声を公開しました。音声はストリーミング方式でWMA<sup>(1)</sup>形式です。本書ではこの音源を宮内庁版と呼ぶことにします。

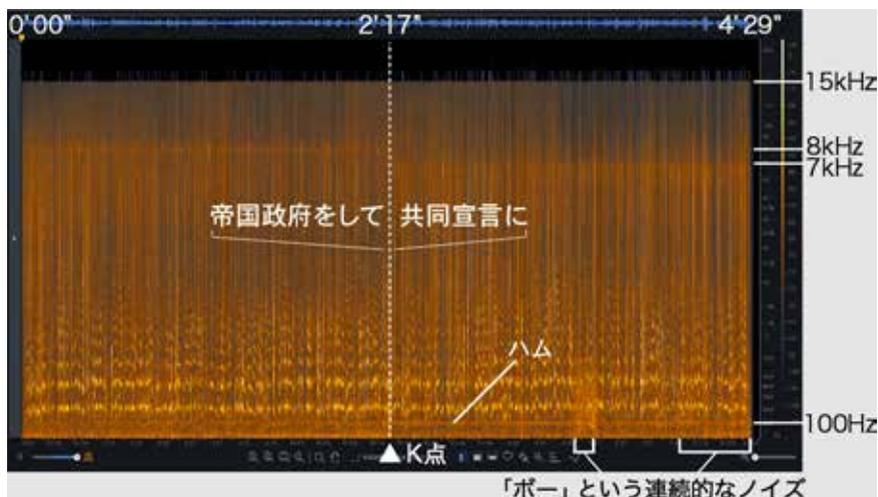
□宮内庁／終戦の玉音放送

→ <https://www.kunaicho.go.jp/kunaicho/koho/taisenkankei/syusen/syusen.html>

声の正味は4分29秒です。図3-2にスペクトログラムを示します。15kHz以上の成分はなく、圧縮ファイルであることが分かります。

宮内庁に保管されていた原盤を、2014年12月17日にレコードプレー

で再生して、デジタル録音したものです。原盤の再生は実に約 70 年振りです。



【図 3-2】 宮内庁版 スペクトログラム

## § デジタル録音

録音に使用された機器を表 5 に示します。

再生機はテクニクスの SL1200Mk4。クォーツロック・ダイレクトドライ

品目	メーカー/ブランド	型番	備考
レコード再生機	Technics	SL1200 Mk4	78rpm
カートリッジ	Stanton	500AL	針圧 5g
レコード針		(3.0mil 丸針)	
フォノイコライザー	(オリジナル)		真空管式
録音機	KORG	MR-1000	1ビット
モニタースピーカー	TIMEDOMAIN	mini	アンプ内蔵

【表 5】 録音機器 (2014.12.17)

## 4 章 玉音盤と宮城事件

### § 録音に至るまで

時計の針を 14 日に戻します。

10 時近くに急遽「平服にて差支えなし、10 時半までに大本営会議室（御文庫附属室）に参集するように」とのお召しが、最高戦争指導会議の構成員と幹事および全閣僚・平沼騏一郎<sup>きいちろう</sup>枢密院議長の合わせて 23 名に伝えられます。

10 時 50 分から開かれたこの御前会議で、天皇は「聖断」を下し、ポツダム宣言の受諾と終戦の詔書の起案を求めます。以下天皇の玉音に関連する発言の骨子です。

「この際私としてなすべきことがあれば何でも厭わない。国民に呼びかけることがよければ、私はいつでもマイクの前にも立つ。一般国民には今まで何も知らせずに居ったのであるから、突然この決定を聞く場合動揺も甚だしいであろう。陸海軍将兵にはさらに動揺も大きいであろう。この気持ちなだめることは相当困難なことであろうが、どうか私の心持ちをよく理解して陸海軍大臣はともに努力し、よく治まるようにして貰いたい。必要あらば自分が親しく説き諭してもかまわない。この際詔書を出す必要もあろうから、政府はさっそくその起案をしてもらいたい。」(下村海南(宏)『終戦記』)

「マイクによる国民への呼びかけ」は、情報局の久富達夫次長の発案で、8 日の下村宏情報局総裁の拝謁、11 日の木戸幸一内大臣の内奏を受けて、天皇が既に聴許したものです。石渡莊太郎<sup>いしわた</sup>宮内大臣・蓮沼蕃<sup>しげる</sup>侍従武官長も同意の上でした。

御前会議は正午過ぎに終了。天皇の発言を受けて、下村総裁は部下の加藤

## 5章 玉音の原稿

玉音放送の文言は、ポツダム宣言の受諾と、国体護持を表明した「大東亜戦争終結二関スル詔書」（終戦の詔書）です。原本は国立公文書館が所蔵しています。

### § 終戦の詔書

本文 802 文字に続いて御名御璽、「昭和二十年八月十四日」の日付、国務大臣副署と続きます。紙は厚手の鳥の子紙です(図 5-1)。鶏卵の色(鳥の子色)に近いことから、そう呼ばれます。

原文は 1 頁 10 行の縦書で、漢字カナ交じり・旧字体・旧仮名遣い・句読点なし・濁点なしで、大変読みづらいものです。

全 5 段落で、各段落は全て「朕<sup>ちん</sup>」(天皇の一人称)で始まります。

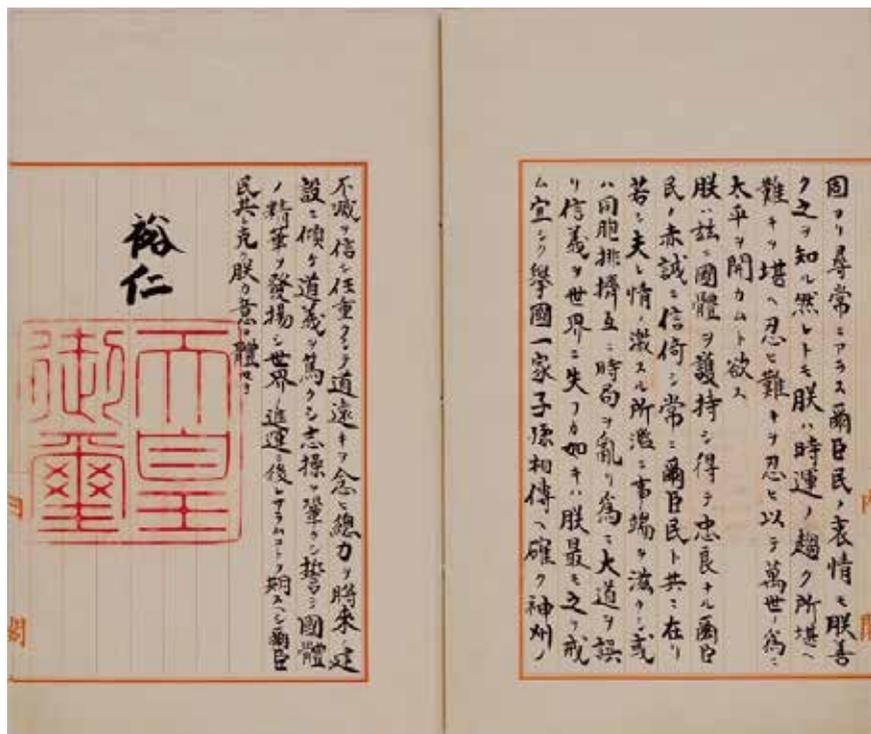
□国立公文書館／大東亜戦争終結二関スル詔書

→ <https://www.digital.archives.go.jp/file/1744405.html>

『真空管の伝説』(筑摩書房)で、著者の木村哲人はこう書いています。

「あの詔書を声を出して読めば分かるが、一度もつかえずに読むのは至難のわざである。私はテレビと映画で四度、俳優に詔書朗読をして貰った経験があるが、一度で読んだ人はいなかった。プロでも途中で必ずつかえてしまう。」

玉音放送に向けて口語化が検討されました。いきなり冒頭の「朕<sup>ちん</sup>」でつまづきます。二人称の「爾<sup>なんじ</sup>」も同様です。"神"である天皇の言葉は口語化できないのです。前例もありませんでした。時間は残されておらず、文語調のままとなりました。<sup>(1)</sup>



【図 5-1】終戦の詔書（3/4）本文に印影が重なるのは本来不可。乾かぬうちに重ねられ、右頁に印影が写っている。

草案は、迫水書記官長が9日深夜の御前会議を終えてから、漢学者の川田瑞穂、安岡正篤ら数名の助力を得て起草を進めていました。

草案の成立過程や文案の策定における閣議の紛糾も、玉音を巡るハイライトの一つですが、ここでは割愛します。巻末に参考文献を付します。

録音用の原稿は原本とは別に、宮内省総務局総務課の佐野恵作御用係が墨筆浄書し、読みやすくするために句読点が朱筆されました。<sup>おおぼうしよ</sup>大奉書（横53cm×縦39.4cm）1枚に縦書き32行です。<sup>(2)</sup>

## § 現代語訳

以下は詔書の現代語訳です。

## 6章 玉音放送当日

### § 玉音盤の動き

玉音盤も無事に15日の朝を迎えました。徳川侍従は、御代拝のため賢所へ向う前の6時頃に、金庫の鍵を三井侍従に渡しました。

まず金庫から出して本庁舎3階の総務局へ運搬します。用心のため、筧が紫の袱紗ふくさの掛かった広蓋ひろぶた(紋章入りの長方盆)に入った副本を運びました。次に岡部長章侍従が正本を運びました。音盤はこのとき初めて、岡部が弁当を入れてきたカーキ色(国防色)の四角い布製の肩鞆(1)に入れられました。

難関は放送会館への送り届けです。同じように二手に分かれました。

正本を携えた加藤局長は庁舎の玄関で、迫水とすれ違います。迫水は11時20分から御文庫付属室で開かれる枢密院会議に向かう途中でした。加藤は警衛課長同乗の警視庁の車に乗り込み坂下門を出ます。

時間をおいて布鞆に入った副本を携えた筧が、宮内省の車で放送会館へ向かいました。放送阻止から援護へと反転した命令を受けた部隊が警護していました。

筧は正面玄関を通り過ぎて下車、入口に立つ着剣した二人の憲兵の間を通過して放送会館に入ります。先着の加藤らと合流します。

正・副とも11時までに放送協会に届き、荒川局長に渡されました。玉音盤はひとまず会長室に保管されます。

ここで正本は2組に分けられ、1組は高橋武治報道部長が第8演奏室に、もう1組は足立迪技術局現業部副部長が、地下に3室あった予備演奏室の1室に届けます。副本は少し離れた第一生命館の地下2階の予備放送室に運ばれました。

後の二つは万一に備えてですが、出番はありませんでした。

15日の玉音盤の動きを図6-1にまとめます。

## 7章 NHK版について

戦後20年にあたる1965年10月に、NHKサービスセンター(現NHK財団)が『昭和の記録』という写真集を刊行しました。「NHK録音集」と題するオープンテープ10巻が付録しています(図7-1)。「早慶戦実況(昭6)」「兵に告ぐ(昭11)」などの実音が収められており、収録時間は3時間半超です。

玉音(全編)も収録されています。玉音の音源がNHKから出たのは、これが初めてと思われます。

同年はラジオ放送開始40周年にあたり、NHKは12月に『日本放送史』という大冊(全3巻、非売品)を発刊します。「放送の誕生から東京オリンピックまで」と題する20cm径のシートレコード4枚が付録しています。「鳳来寺山の仏法僧(昭10)」「前畑がんばれ(昭11)」などが収録されています。

また、1968年に明治百年を記念して、日本グラモフォンから『昭和の記録』LP版(2枚組MB9001-1～2)が発売されました(図7-2)。音源提供はNHKで、ナレーターは宮田<sup>(1)</sup>輝です。

1970年にNHKサービスセンター創立20周年記念として、カセットテープ6巻付録の同名の写真集が刊行されました(図7-3)。

いずれにも玉音(全編)が収録されています。これらを含む同系の玉音を、本書ではNHK版と呼ぶことにします。

これまでラジオやテレビで放送されてきたのは、NHK版です。初めて放送された時期は不明です。



【図7-1】『昭和の記録』オープンテープ第9巻（1965）リール径85mm、テープ速度9.5cm/s、ハーフトラック・モノ。



【図7-2】『昭和の記録』LP版（1968）

## 8章 読売版の怪

### § 読売フォノカード

『週刊読売』1961年8月20日号（図8-1）に付録のシートレコードがあります。14cm角で色鮮やかです（図8-2）。

君が代とナレーションに続いて、玉音が2分33秒抄録されています（図8-3）。天皇の声は本物ですが、聞いた時に違和感を覚えました。理由は二つです。

①声が宮内庁版に酷似している

②ラジオ然とした雑音が過剰で人為的に感じる

NHK版が世に出た1965年より4年早いことに注目です。戦後に玉音を聞くことのできた初めての音源です。

同誌はこの号より、『日本終戦史<sup>(1)</sup>』の連載を始めました。「フォノカード」は商品名です。録音は片面で5インチ径、厚さ約0.2mm、33⅓回転。大日本ボイス（大日本印刷の子会社）の製作です。

フォノカードは、台紙に圧着した透明のポリ塩化ビニールの薄い膜に音溝を成形します。音質は一般のシートレコードより劣り、個々のぼらつきが大きいです。数十万単位で製作されたと思われます。

台紙の印刷面は樹脂の被膜に覆われ、60年を経ても光沢が保たれています。

「君が代」（歌なし）で始まり、途中から次のナレーションが重なります。

「昭和20年8月15日正午、国民すべての人々がラジオの前に立ちつくして、それぞれの感慨で聞き入ったのが、終戦詔勅の玉音放送であります。天皇陛下自ら吹き込まれたこの玉音盤は、同時に新しい日本の誕生を告げるお言葉でもありました。『日本終戦史』の編纂にあたり、週刊読売では歴史的に最も意義深い資料として、読者の皆様にお送りするものです。」

# 9章 寺田版および玉音盤のまとめ

新たに寺田版と、これまでみてきた宮内庁版／NHK版／読売版のまとめを記します。

## § 寺田版について

図9-1は1973年8月15日の中日新聞です。同日午後の中部日本放送(CBC)のテレビ番組での寺田和雄所有の音盤の音声公開をとり上げています。

記事によると、終戦時にNHK技術局職員だった寺田(1952年よりCBCテレビ制作局勤務)は、1945年10月に米軍将校(所属不明・少佐?)から玉音原盤の複製の依頼を受け3組を製作。1組を将校に渡し、1組をNHKに残し、1組を自宅に持ち帰ったとしています。

「3組」との記述および新聞の写真が2枚であることから、1組は片面録音の10インチのセルロース盤2枚と思われます。

複製の大筋はNHK版の春名静人の話に似ていますが、時期が異なってい



【図9-1】中日新聞 1973.8.15

## 10章 副本(録音1回目)について

正本と副本は別々に二つの缶に収納され、宮内庁が嚴重に保管してきました。

副本は、**文研**がラジオ放送開始50周年を機に宮内庁に申し入れ、お貸し下げ(貸与)されました。1975年5月に愛宕山の**NHK放送博物館**に納められます。

傷みがひどく再生不能でした。ラッカー層の脆化と収縮により、ひび割れ・剥離が進行していました(図10-1)。

徳川侍従は、「一時占領軍に提出し、戻ってきましたが、五年ほどで割れて使えなくなつた」と書いています(『侍従医の遺言』)。(※実際に貸し出されたのは正本)

外観の修復・保存に当たった技研の**松井茂**主任研究員は「**全6枚のうち、2枚を除いて、聞きしにまさる痛み様**」と記しています<sup>(1)</sup>。

修復には、樟腦<sup>しょうのう</sup>の蒸気中に音盤を入れ、数十日掛けてラッカー層に浸透拡散させ、軟化する方法が取られました。

1枚ごとにアクリル製のケースに収納し、1976年3月の同館開館20周年記念展で公開されました。

正本と同じ条件で保管されていたのに、副本だけが大きく損傷した原因は不明です。



【図10-1】副本修復前の1枚「B3一回目」の書込み。(『放送博物館の三十年』1986より)

# 11章 実音レコード

諸技術の進歩により野外録音が可能になると、放送協会はこれに積極的に取り組みました。様々な実音レコードが製作・販売されました。

日中戦争が始まると、戦地に録音隊を派遣しました。

1941年（昭16）12月に開始された「香港攻撃」「馬米（マレー）作戦」「比島（フィリピン）作戦」「ビルマ作戦」などが現地録音され、録音盤は東京へ空輸されました。

戦況を伝える日々の報道や、「週間録音」「勝利の記録<sup>(1)</sup>」などの特集番組で活用されました。砲声が轟く臨場感のある音声は、日本軍の快進撃を賞賛し、国民の熱狂をあおって戦意高揚に寄与しました。

□ NHK アーカイブス／勝利の記録

→ [https://www.nhk.or.jp/archives/search/?keyword=%E5%8B%9D%E5%88%A9%E3%81%AE%E8%A8%98%E9%8C%B2&ag=sensou&type=all&page=1\\_24](https://www.nhk.or.jp/archives/search/?keyword=%E5%8B%9D%E5%88%A9%E3%81%AE%E8%A8%98%E9%8C%B2&ag=sensou&type=all&page=1_24)

戦果を伝える放送は、陸軍は「分列行進曲」、海軍は「軍艦行進曲」、両軍共同のときは「敵は幾万」で始まりました。

戦争後期には戦死者のニュースが増え、「海ゆかば」が流れるようになります。

## § 『勝利の記録』

1943年（昭18）3月10日の陸軍記念日を期して、日蓄工業<sup>(2)</sup>はSP盤11枚組の『大東亞戦争録音史 勝利の記録』（53002～12）を発行しました。戦地での録音も収録されています。

大本営陸軍報道部の監修のもと、中村茂放送協会業務局告知課長による開

戦の詔書奉読、東條英機首相の「大詔を拝し奉りて」、大本営発表、ナレーションや音楽などで構成されています。収録時間は全体で1時間半ほど(図11-1、2、3、4、5)。

同年の音盤文化賞を受賞しました。

同名の主題曲を服部良一が作曲しています。

1962年に『大東亜戦録音史』として、日本コムビアからLP盤2枚組再発されました(AL-40～4100)。



■大東亜戦争録音史「勝利の記録」

【図11-1】『勝利の記録』



【図11-2】『勝利の記録』  
12インチSP盤11枚組、  
定価：38円83銭(80%  
の物品税込み)。

## あとがき

歴史は必然の<sup>たて</sup>経糸と偶然の<sup>よこ</sup>緯糸で織りなされます。

80年前の8月14日～15日もまさにそうでした。ほんの少しの糸の掛け違いで、あの玉音は放送されなかったかも知れないのです。そうなれば、日本の戦争史・戦後史は大きく変わっていたことでしょう。

「退却」を「転進」、「全滅」を「玉砕」と言い換えた日本（帝国）は、「敗戦」を「終戦」と言い換えて降伏し、「占領」を「進駐」と言い換えて敵（連合国）軍を迎え入れました。

このように自らの都合を優先し本質から目を逸らす心根は、軍国主義が衰退し、新憲法が発布され天皇の地位が大きく変わっても、今も多くの日本人の精神の底流に宿っているのではないのでしょうか。

2020年に始まったコロナ禍は、私が携わっている舞台芸術にも多大な影響を及ぼしました。またそれは現代社会の脆弱性のみならず、日本の社会の劣化をも露呈する結果となりました。

政治・経済・社会・環境などの諸問題から目を逸らし、本質的な解決を後回しにすれば、ウイルスがもたらすものとは別の大難を招来する結果となることは目に見えています。

歴史の縦糸と緯糸を自在にあやつることはできませんが、未来を失うわけにはいきません。

2015年に70年振りに甦った玉音原盤の音声ですが、その謎を追ううちに、期せずして新旧の録音方式・録音媒体に触れることになりました。

玉音が録音された1945年から、NHK版が発行される1965年に至る20年は、機械式録音から磁気録音へ、真空管からトランジスタへ、レコード盤がSPからLP（マイクログルーヴ）へと、録音技術が大きく変革した時代でした。1950年代には国産の磁気テープ録音機が発売され、1960年代にはステレオが普及します。

Hi-Fi（ハイファイ）ブームの最中だった当時の技術の未熟さゆえに、玉音の解析が可能となった一面もあります。

一方、宮内庁による玉音盤の録音がデジタルでなされたことを見ても分るように、録音技術の長足の進歩には目を見張るものがあります。

阿部美春氏の名連載『国産円盤録音機物語』（JAS ジャーナル 2003~04）がなければ、本書は生まれませんでした。

玉音放送研究家の日比恆明氏と、日本ラジオ博物館館長の岡部匡伸氏からは多くのご教示と貴重な資料の提供を受けました。感謝申し上げます。

図・イラストの製作では江平朝子さん、松村あやさんの協力を得ました。地人館の大角修・佐藤修久ご両名の支援がなければ、この本は生まれませんでした。合わせて深く感謝申し上げます。